

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビ ジ ョ ン 各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、
日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
	○ 各校とも児童生徒が意欲的に授業や行事に取り組んでいる様子が見られ、一定の成果が出ている ○ 各校が、地域の施設に出向いたり、地域の方々を招いたり、地域とのかかわりを重視した学習活動に工夫して取り組んでいる ● 学校間、地域が連携を深め、より多くの子どもたちが地元の中学校で過ごせるよう魅力づくりを進めたい	○ 「子ども主体の学び」を目指し、小・中学校が連携して研究・実践を行い、授業改善を進めており、地質生徒の授業に対する意欲、積極性は高まっている ○ 行事等を通して、小・中学校とも集団作り、児童生徒の主体的な活動に取り組んでおり、意欲的に頑張る児童生徒は増えている ● すべての学習の基盤となる「ことば」にこだわり、伝えたり、読み取ったりする力を育てていきたい ● 引き続き、不登校児童生徒への丁寧な取組が必要である	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	地域の愛着と誇りをもち、心豊かにたくましく生きるこども ☐ 自己肯定感を高める（児童会・生徒会の合同活動・中学校オープンスクール） ☐ コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける（保幼小中連携教育・合同授業研） ☐ 健康への意識を高め、体力向上を図る（体力向上の取組・体力テストの分析・生活改善の取組・校区保健だよりの発行）

育成する力 資質・能力	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
めざす子ども像 全学年	自ら学び 心豊かに たくましく生きる 児童 ○ 自ら疑問や課題を見つけ、解決に向け、自分や仲間と意欲的に調べたり考えたりして、学び続けている。 ○ 自分たちの生活をよりよくしようと、積極的に考え、取組を企画し、仲間と協力しながら、行動している。 ○ 友達や先生、家族、地域の人など、関わりある全ての人に感謝の気持ちをもち、自分の言葉で表現している。 ○ 周りの人と意見が違って、互いの考えを尊重しながら受け入れ、建設的に話し合っている。 ○ 命の大切さを知り、命あるものに対して、優しい気持ちをもっている。 ○ 難しい課題や問題に対して、どうしたらできるようになるか、あきらめずに前向きに考え続けたり、新しいことに積極的に挑戦したりしている。 ○ 外で元気に遊び、体を動かすことを楽しんでいる。

III 自 校
ミッション
安全・安心な学校づくりに全職員一丸となって取り組む ～「今日も楽しかった！早く明日にならないかな！」と考える学校～
学校教育目標
自ら学び 心豊かに たくましく生きる 児童の育成
現 状
児童が主体的に「学び」を深め、よりよい生活を築いていけるよう、「夢中になる授業」づくりや互いを認め合える集団づくりに取り組んできた。その取組を振り返り、よりよいものへと改善していくための指標とするべく、全児童を対象にアンケートを実施した。 ■「学校が楽しい」…97% ■「授業で考えることが面白い」…92% ■「友達や家族、先生に『ありがとう』と言われたことがある」…97% ■「自分のため、みんなのためにと考え、行動している」…95% 昨年度の全国学力・学習状況調査（6年対象）、学びの伸びを把握する調査（4.5年対象）については以下の結果であった。 ■「全国学力・学習状況調査正答率 40%未満の割合」… 国語 15.5%(全国 11.9%) 算数 22.2%(全国 20.1%) ■「学びの伸びを把握する調査正答率 40%未満の割合」…国語 25.8% 算数 28.6% 自己決定の機会を増やし体験的に学ぶ場を設定することで、児童の生活意欲や学習意欲は向上している。一方で、学力の定着には依然として課題がある。教職員が教材研究を深め、児童が学ぶことの面白さを実感できるよう工夫しながら、学力向上に取り組む必要がある。

育成する力 資質・能力	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
めざす子ども像 全学年	自ら学び 心豊かに たくましく生きる 児童 ○ 自ら疑問や課題を見つけ、解決に向け、自分や仲間と意欲的に調べたり考えたりして、学び続けている。 ○ 自分たちの生活をよりよくしようと、積極的に考え、取組を企画し、仲間と協力しながら、行動している。 ○ 友達や先生、家族、地域の人など、関わりある全ての人に感謝の気持ちをもち、自分の言葉で表現している。 ○ 周りの人と意見が違って、互いの考えを尊重しながら受け入れ、建設的に話し合っている。 ○ 命の大切さを知り、命あるものに対して、優しい気持ちをもっている。 ○ 難しい課題や問題に対して、どうしたらできるようになるか、あきらめずに前向きに考え続けたり、新しいことに積極的に挑戦したりしている。 ○ 外で元気に遊び、体を動かすことを楽しんでいる。
研究	テーマ 山手発！夢中になる授業 ～育てよう！教科の目と芽～ ①導入の工夫（生活とのつながりのある、わくわく感のある、「？」が生まれる導入） ②表現方法の工夫（振り返りや考察の書き方、ICTの活用） ③授業の進め方の工夫（学習サイクル、児童主体の計画、自己決定の場・体験的に学ぶ場の設定）
めざす授業の姿	・ 児童が「何のために学ぶのか」や「生活のどことつながっているのか」感じられる学習活動になっている。 ・ 児童が解決したくてたまらないわくわく感のある学習活動となっている。 ・ 児童が「体験的に学ぶ」ことができている。 ・ 児童が学習内容や課題を「自己決定」している。（ICTの活用） ・ 児童が自分の考えを整理して表現している。（ICTの活用）

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立山手小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 _レ ス 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 _レ ス 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
5	主体的・対話 的で深い学び による学習意 欲と学力の向 上	★	継 続	わくわく感をも って学習に 取り組み、自己 の「伸び」を実 感できる児童 の育成	興味・関心を引 き出す導入を 行い、日常生活 とのつながり を意識させる 授業を行う。	□「授業で学んだ ことを、次の学 習や実生活に 結び付けて考 えたり、生かし たりすること ができてい る。」の肯定的評 価を90%以上 にする。 □学力調査正答率 40%未満の児 童の割合を前年 度以下(国語 25.83%・算数 28.56%)にする。	□研究内容の3つの 柱(①導入の工夫② 表現方法の工夫③ 授業の進め方の工 夫)に基づき、授業 を行った。そして、 夏季研修で互いの 実践を交流する機 会を設けた。児童ア ンケートの肯定的評 価は89%であった。	3	3	・授業改善を図り、児童の 肯定的評価をさらに伸 ばしていくために2学 期以降も引き続き、研究 の3つの柱を意識しな がら授業に臨み、実践を 交流する機会を設けて いく。 ・学力調査の分析から「基 礎基本の定着」と「自分 の考えを表現する力の 育成」が必要であると分 かった。学力補充の内容 を再検討し、計算・漢字 の学習に取り組む機会 を増やす。 ・繰り返し説明をさせたり モデルとなる説明の 真似をさせたりするな どし、どの児童にも、考 えを表現する力を育成 していく。	□1学期の振り返りを生 かし、研究の柱に基づい て授業を行い、生活や前 時とのつながりを意識 した授業となるよう、互 いの授業を見合ったり、 研修をしたりした。児童 アンケートの肯定的評価 は、92%であった。 □基礎基本の定着を図る 取組を行うとともに、授 業づくりポートフォ リオを活用し、児童のつま ずきから個に応じた支 援を行った。 □考えを表現する力の育成に 向け取り組んだが、児童ア ンケートにおいて、「自分 の考えとその理由を明らか にして、相手にわかりやす く伝えるように発表を工夫 している」と回答した児童 は、83%にとどまっている。	4	4	4	・来年度は、児童同士 の「対話」も意識し た授業となるよう にしていきたい。 ・授業づくりポート フォリオを活用し、 児童のつまずきに 基づいた授業づく りを行い、基礎基本 の定着を図る。 ・自分の考えを表現 するための語彙力 が乏しかったり、説 明の方法が分から なかったりする児 童が多い。分から ない言葉を辞書など で調べる習慣をつ けるとともに、説明 の方法を伝えたり、 児童とともに考え たりする。
3	自己指導能力 の育成	★	継 続	よりよい学校 生活にしてい こうとする児 童の育成	児童会を中心 に、あいさつの よさを実感で きる取組を行 う。	□「自らあいさつ をしている。」と 肯定的な評価を している児童を 90%以上にす る。 □「家族、友達、地 域の人、先生に 『ありがとう』 を伝えている。」 と肯定的な評価 をしている児童 90%以上にす る。	□「自らあいさつをし ている。」と肯定的 な評価をしている 児童は90%であ ったが、児童の認識 と実態とにずれが あり、「あいさつ」 という行為はでき ているが、習慣化さ れていないと感じ ている。 □「ありがとうカー ド」の取組を全校で 行っているが、クラ スにより取組状況 に差があった。「家 族、友達、地域の人、 先生に『ありがとう』 を伝えている。」と 肯定的な評価をして いる児童は94%であ った。	3	3	・「あいさつ」に関するス ローガンを児童会から 提案することで、「いつ でも、どこでも、だれに でも」気持ちのよい挨拶 をする意識を全校に 広め、高めていく。 ・「ありがとうカード」達 成者に職員が肯定的な 声掛けをしたり、全校放 送などで達成状況を伝 えたりすることで、積極 的に伝えようとする意 欲を高めたり継続させ たりしていく。 ・「ありがとう大作戦」に 消極的な児童に教職員 が感謝の気持ちを伝え たり、帰りの会などで 互いにありがとうを伝 え合う時間を作ったり することで、「ありがとう」 と言われる良さ実感 させる。	□「自らあいさつをして いる。」と肯定的な評価 をしている児童は91% であったが、児童の意識 と児童実態に乖離が見 られる。知り合いや友人 など、特定の人同士で積極 的に交流する姿が見 られたが、交流が少ない 児童同士の「あいさつ」 を通じた交流は少な かったように感じる。 □「ありがとうカード」の 取組を全校で行って いるが、クラスにより取 組状況に差があった。「家 族、友達、地域の人、先生 に『ありがとう』を伝 えている。」と肯定的な 評価をしている児童は 96%であった。	3	3	4	・「貢献活動」と「あい さつ」を関連付け、 貢献活動の一環と してあいさつの取 組を行うことで、学 校全体で雰囲気づ くりをする。 ・帰りの会などで他 者評価を交流する 際の工夫などを提 示し、特定の児童 だけでなく、児童み んなが他者を評価 したり、評価され たりする場を意図 的に創出する。

				自己の健康と体力を高めるために実践しようとする児童の育成	児童の健全な生活習慣を確立する取組を行う。	□「メディアの利用時間2時間未満」の児童を昨年度(61%)以上にする。	□福山市の「生活習慣の7つの目標」について、各学級で話をしたり懇談で話題にしたりした。「メディアの利用時間2時間未満」の児童は、66%であった。	3	4	・家庭と連携し、チャレンジメディアを定期的に行ったり、生活習慣目標を示したりして、規則正しい生活習慣を意識して取り組むことができるようにする。また、「生活習慣の7つの目標」について、頑張りカードの項目として入れることで意識を高め、生活習慣の改善につなげる。 ・高温や雨などで外遊びができない時は、体育館の貸し出しをしたり、引き続き、児童会行事や縦割り班の遊び集会などおこなったりしながら、外遊びの機会を増やし、運動を楽しむ機会を作る。	□チャレンジメディアを定期的に行ったり、「メディアと脳の関係」について知らせたりした。「メディアの利用時間2時間未満」の児童は、63%であった。	3	3	4	・メディアの使用時間と学力や健康への関係について、保護者に伝えるとともに、学年に応じたメディア教育を学期に一回程度行う。 ・頑張りカードの項目に生活習慣に関する内容を入れ、生活習慣を意識させる。 ・保護者、教師、児童が参加できる講演会などを企画する。 ・児童会や体育委員会と連携し、キャンペーンを行うだけでなく、外遊びを促す声かけを行う。
2	授業力と挑戦意欲の向上		継続	授業に真摯に向き合い、互いの個性やよさを生かしながら協働できる教職員	児童の「学びの姿」をもとに授業づくりについて話し合い、協働して教材研究を進める。	□「研究テーマや児童の学びの姿を意識して教材研究を行っている。」と答える教職員を90%以上にする。	□研究テーマや授業づくりの視点などの周知や全体研修を行い、研究授業前には、全体で事前研を行いながら、協働して教材研究を進めている。教職員アンケートの肯定的評価は100%。	3	4	・授業づくりについて、研究授業以外にも定期的に研修をもち、学校全体で研究に取りくんで行く意識をさらに高める。 ・個々の得意なことや挑戦したいことについてのアンケート結果を周知したり授業をいつでも見合える環境づくりをしたりすることで、挑戦意欲を高める。	□毎回の授業研究では事前事後に全体で協議を行い、教材研究を深めた。また、理科の研修を月一回程度行い、全体で研究に取り組む意識を高めていった。教職員アンケートの肯定的評価は、100%であった。	3	3	3	・引き続き、研究テーマを明確にした研修を行い、自己の授業力を高めるための主体的な教材研究を行う意識を高める中で、全員で研究に取り組む意識もつ。 ・困り感を伝え合うことができる場をつくるなど、いつでも話しやすい職場環境にしていこう。

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。